

「旧約の信仰者たちの手本」の「族長時代」(11:8~22)

■へブル人への手紙の構成

二つの主要な区分	内容	箇所	警告
第一区分： 神学的理論を中心に (適用としての警告 も含む) ユダヤ教の三本柱と 御子との比較	テーマ	1:1~3	
	天使たちに優る御子	1:4~2:18	警告① 2:1~4
	モーセに優る御子	3:1~6	
	第二の警告	3:7~4:13	警告②
第二区分： 適用(御子の優位性を 理解した上での、信者 の歩み)	アロンに優る御子 (レビ族アロンの家系の祭司 職に優る御子)注①	4:14~10:18	警告③ 5:11~6:20
	勧めのための2つの基盤と4 つの勧め、警告、励まし	10:19~39	警告④ 10:26~31
	旧約の信仰者たちの生き方を 手本とする	11:1~40	
	信仰を持ち続けることの勧め	12:1~29	警告⑤ 12:25~29
	まとめとしての勧め	13:1~25	

注① レビ族アロンの家系の祭司職 ⇒ 以下、「レビ系祭司職」

■「旧約の信仰者たちを手本とする」11章の構成

細目	内容	箇所
信仰の忍耐	信仰の特徴	1節
	このような生き方が可能であることを実証した人々がいる	2
	目に見えないものを確信する事例=天地創造	3
族長時代以前	アベル	4
	エノク	5~6
	ノア	7
族長たち	アブラハム	8~19
	イサク	20
	ヤコブ	21
	ヨセフ	22
荒野の旅	モーセの両親	23
	モーセ	24~28
	イスラエル民族の人々	29~30
	ラハブ	31
試練の中で	イスラエル国史に見る信仰(士師たち・王たち・預言者たち)	32~34
	信仰は死を乗り越える	35~38
信仰の勝利		39~40

■ 前回の内容 「旧約の信仰者たちの手本」の「族長時代以前」② (11:7)

手本となる生き方	内容	箇所
神の定めた方法によって、神に近づく	アベル (創 4:2~8、マタ 23:35)	4
神のことばを伝える。世からは拒絶される。しかし、神との交わりの中に憩う=神と共に歩む、神に喜ばれる	エノク (創 5:21~24、ユダ 14~15)	5~6
神の命令に従順に従う 世を罪に定める	ノア (創 6:1~22、Ⅱペテ 2:4~5)	7

1. ノア (7節)

- (1) ノアは、神から警告を受けた。それは、まだ見ていない事がらについてであった。
- (2) しかし、ノアは、神を恐れかしこみ、その信仰によって、箱舟を造った。
- (3) その結果、彼の家族は助かった。
- (4) ノアは、世の罪を定めた=彼の生き方と証しは、他方でそれを嘲笑う人々の不信仰を明らかにした。
- (5) ノアは、信仰による義を相続する者となった=神はノアをその信仰によって義人であると認めてくださった
- (6) ノアは、信仰の従順、または信仰によって神に従うという生き方の手本である。

2. 創世記より

- (1) ノアは、どういう警告を受けたのか (6:17)
- (2) 神は、なぜ大洪水のさばきを地上にもたらそうとしたのか (6:13、6:1~7)
- (3) 墮天使たちが、人間の女と雑婚した目的は何か。墮天使たちは、その後、どうなったのか (3:15、Ⅰペテ 3:19~20、ユダ 6)
- (4) ノアは、洪水を見たことがなかつたのか (1:6~7、2:5~6)
- (5) 神は、ノアにどのような命令を与えたか (6:14~16、18、19~21)
- (6) 箱舟の建造期間は、何年か (6:3)
- (7) ノアは、自分で動物たちを集めたのか (7:8~9)
- (8) ノアは、自分で箱舟の入り口を閉じたのか (7:16)
- (9) ノアは、自分で箱舟を操縦したのか (7:18)
- (10) ノアとその家族は、どのくらいの期間、箱舟にいたのか (7:4~11=第二の月の10日、8:14=第二の月の27日、1年と18日=360日+18日=378日、7の倍数)
- (11) ノア契約の内容と、そのしるしは何か (9:1~17)
- (12) ノアの3人の息子、セム、ハム、ヤペテ。ノアの預言では、彼らの特徴は何か (9:20~27)
- (13) 人類最初の権力者ニムロデは誰から出たか。ニムロデが建てた町は? (10:6~12)
- (14) 人類の諸民族は、3人の息子たちからどのように分かれていったか (10章)
- (15) バベルの塔の事件とはどういう出来事か (11:1~9)
- (16) 人類が異なる言語で分かれ、諸国家が分かれて互いに一致することのないことは、神の計画の中ではどのような意義があるのか (11:6、使 17:26~27、申 32:8)

- (17) バビロンは、その後の歴史の中で、どういう役割をはたしてきたか (ダニ 1:1~2、2:31~45)
- (18) バビロンは、来るべき 7 年間の患難期においてどのような役割を担うのか (ゼカ 5:5~11、黙 17:1~18、18:1~24、イザ 13:1~3)
- (19) 日本人は、セム、ハム、ヤペテ、どの系統に属するのか (10:15~18)

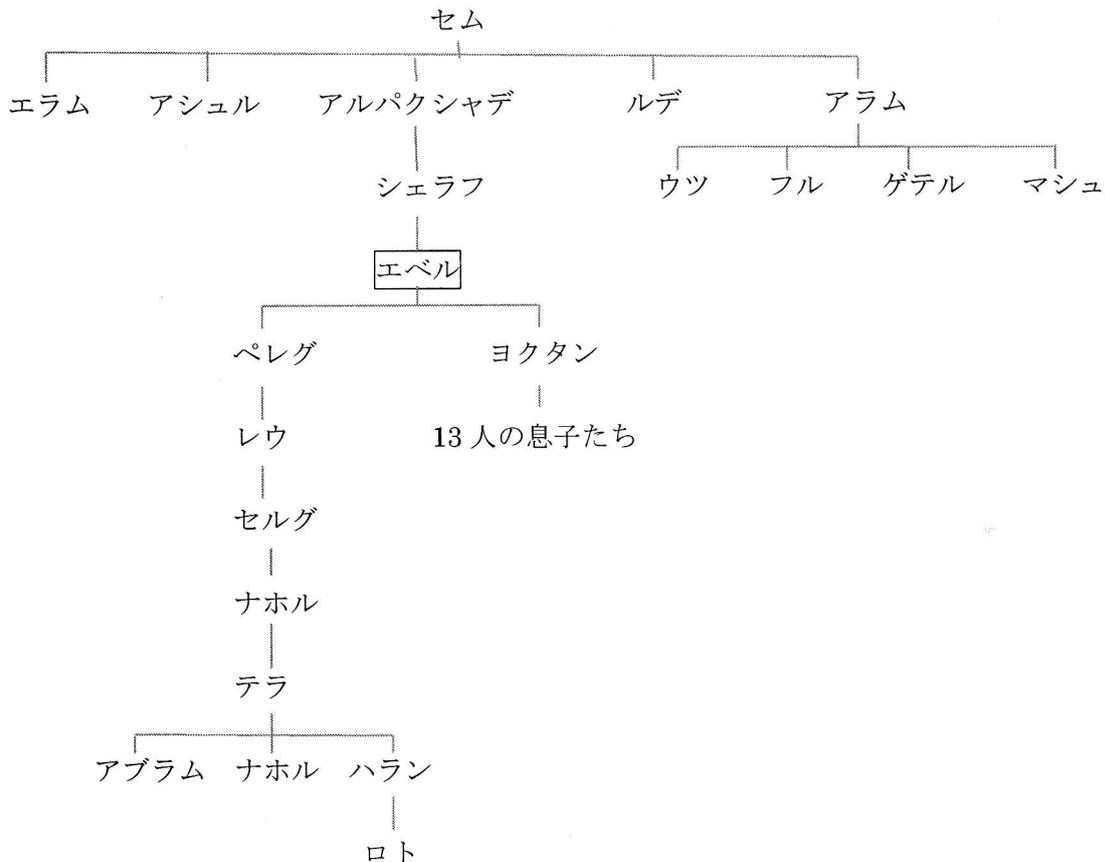
■ 今回の内容 「旧約の信仰者たちの手本」の「族長時代」① (11:8)

手本となる生き方	内容	箇所
神の召命を受けて 生まれ故郷を離れる	(使徒 7:2~5、創 11:31~12:7)	8
寄留者となる	ア ブ ラ ハ ム	(創 13:18、22:19、23:4、24:67、25:27)
		(創 24:7)
不可能でも子が生まれると いう約束を信じる		(創 17章、ロマ 4:17~22、創 18:1~15)
目前の土地ではなく、より 優る国を求める		
イサクを捧げることを通し て、復活を信じる		(創 22:1~18)
未来について、神の約束を 信じる	イサク (創 25:21~34、27:1~40、28:1~5)	20
	ヤコブ (創 47:28~48:20)	21
	ヨセフ (創 50:22~26)	22

生まれ故郷を離れる (8節)

(フルクテンバウム博士著「The Book of Genesis」P.203~239による)

セムの系統



1. セムからペレグまでの家系 (創 10:21~25)

(1) ノアには、3人の息子 (セム、ハム、ヤペテ)。そのうち、セムの子孫について。

(2) 10:21 セムは、「エベルのすべての子孫の先祖」であって、「ヤペテの兄」

① 「ヤペテの兄」： 創 9:24 ではハムは「より若い息子 (最も若い息子ではなく、二番目の息子という意味)」であるから、3人の年齢順は、聖書の記事のとおり、セムが長子で、「セム、ハム、ヤペテ」である。

② 「エベルのすべての子孫の先祖」： **エベル**は、24節に登場する。セムから4代目。エベルはヘブルの語源。エベルは、ヘブル人の先祖である。

(3) 10:22 セムの5人の息子。エラム、アシウル、アルパクシャデ、ルデ、アラム

① エラム： バビロンの東の地域を指す地名になる。

● この地域には後に、ヤペテ系のペルシア人が入って来て、スサ (シュシャン) に首都を置く (エステル 1:2)。

② アシウル： ティグリス川上流域のアッシリアの国土を指す地名になる。アシウルという町もあったが、その地域一帯を指す地名でもある。

- アッシリアの首都はニネベ。
 - 創 10:10~12、ニネベを最初に建てたのは、ハム系のニムロデ。ニムロデの王国の初めは、バベル(後のバビロン)。ユーフラテス川下流域の「ヘシヌアル」、またはカルデア(11:28)と呼ばれた地域であった。しかし、バベルの塔事件で言葉が通じなくなり、ニムロデはアシュル地域に移動し、ここにニネベの町を建設した。その後、この地域は、セム系のアシュル族が住むようになった。
- ③ アルパクシャデ: カルデアの地に住んで、カルデア人と呼ばれるようになった。また、アッシリアの地域内にも、アルパチデスという町があった。
- ④ ルデ: アッシリアの地域の中。後には、西に移動して小アジアのリディア。
- ⑤ アラム: ダマスコとユーフラテス川の間の地域は、アラメアと呼ばれていた。アラムは、ヘブル語で「シリア」を意味する。
- (4) 10:23 アラムの4人の息子。彼らは、アラメアとメソポタミアの間に展開したシリア人の諸族となっていく。
- (5) 10:24 アルパクシャデ→シェラフ→エベル
- ① 七十人訳聖書は、「アルパクシャデはケナンを生み、ケナンはシェラフを生みとする → ルカ3:36の「カイナン」
- ② エベルは、カルデアのウル(11:28)、アラム・シリアにあった町ハラ(11:31、27:43)、ハランのあった地域パダン・アラム(アラムの平野、28:2)の3つの地域を表す名称である(F著219頁)。
- ③ エベルはヘブルの語源。エベルは、ヘブル人の先祖である。
- (6) 10:25 エベルには、二人の息子。ペレグとヨクタン。ペレグが生まれたときに、「地が分けられた」=創世記11:1~9、バベルの塔の事件
- ① ペレグが生まれたのは、洪水から何年か? $2+35+30+34=101$ 年(11:10~16節)。よって、バベルの塔事件は、洪水から100年となる頃である。
- ② ノアは洪水の後、350年生きた(9:28)、セムは502年生きた(11:10~11)ので、バベルの塔事件のときは存命であったことになる。
2. セムからアブラムまでの家系(創11:10~26)
- (1) 11:10~25 セム→アルパクシャデ→シェラフ→エベル→ペレグ→レウ→セルグ→ナホル→テラ
- ① 洪水からテラの誕生までは、 $2+35+30+34+30+32+30+29=222$ 年
- (2) 11:26 テラは70歳のときに最初の息子をもうけた。息子は3人で、アブラム、ナホル、ハラ(ン)。
- ① アブラムを長子とすると、洪水からアブラムの誕生まで、 $222+70=292$ 年
3. テラの家族(11:27~30)
- (1) 11:27 テラは、3人の子をもうけた。アブラム、ナホル、ハラ(ン)。ハラ(ン)は、ロトを生んだ。孫のロトにまで言及しているのは、この後の登場人物となるから。
- (2) 11:28 ハラ(ン)は、父テラの存命中、彼の生まれ故郷であるカルデア人のウルで死んだ。ハラ(ン)が生まれたのはウルであるとわざわざ説明しているのは、父テラの生まれ故郷とは違うということ。
- ① テラの生まれ故郷は、アラム・シリアの地のハラ(ン)
- ② 長男のアブラムも、ハラ(ン)で生まれた。「あなたの生まれ故郷」(12:1)。

- アラムの地で生まれたので、アブラムは「アラム人」(申 26:5)である。
10:22 のセムの五男「アラム」の子孫という意味ではない。
- (3) テラは、長男アブラムを連れて、ハランから南東に 600 マイル (1 マイル=約 1.6 km) 離れたウルに移住した。次男ナホルと三男ハランは、ウルで生まれた (F 著 236 頁)。
- (4) ハランとウルは、離れてはいても、エベル族の地域。ともに月を拝む宗教の中心地であった。月神シン。
- (5) 「テラは、ほかの神々に仕えていた」(ヨシュア 24:2)。家族に付けられた名には、月神信仰の影響がある。
 - ① テラは、「月」。テラの父ナホルも月神信仰をしていたことを示す。
 - ② テラの娘(アブラムとは異母)サライは、月神シンの妻の名シャラッテ(女王)に由来する。
 - ③ 三男ハランの娘、すなわち孫娘のミルカは、「プリンセス」の意味で、月神シンの娘イシュタールを指す。
 - ④ 次男ナホルはミルカを妻として 8 人の息子とそばめのレウマから 4 人の息子、計 12 人をもうけた(創 22:20~24)。後に登場する、ナホルの孫、ラバン(創 27:43)はハランに住んでいて、その名、ラバンは「白」、満月を表現する詩的な表現である。
- 4. ウルで神からのアブラムへの 1 回目の召命(使徒 7:2~5)と旅立ち(創 11:31~32)
 - (1) 使徒 7:2~5 アブラムに神が現れて「あなたの土地とあなたの親族を離れ、わたしがあなたに示す地に行け」と言われる。
 - ① 「ハランに住む以前」・「まだメソポタミアにいたとき」
 - ② アブラムは、ウルに住んでいたときに、神の召命を受けた。
 - (2) 創 11:31~32 アブラムは父テラを説得して、神の召命に従ってカルデア人の地のウルから旅立ったと推定される。しかし、彼らの生まれ故郷であり、ウルと同じく月神信仰の中心地であるハランまで来たときに、父テラはそれ以上旅を続けようとはしなかった。一行は、ハランに住んだ。父テラはハランで死去、205 歳。
- 5. ハランで神からのアブラムへの 2 回目の召命(12:1~7)
 - (1) 「あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい」
 - ① このときアブラムは 75 歳。洪水からは $292+75=367$ 年となる。ノアは洪水後 350 年生きたから、ノアが世を去ってわずか 17 年である。
 - ② ノアの時代からアブラムへの時代へと、神のご計画の中での時代が変わる。
 - (2) アブラムが 75 歳とすると、テラは 145 歳のはず。創 11:32 ではテラが死んだのは 205 歳。では、アブラムはテラが存命中にハランを出発したのか? それでは使徒 7:4 「父の死後」と一致しない。
 - ① A 説 アブラムは長男ではなく、テラが 130 歳のときに生まれたと解釈する。(中川先生の「日本人に贈る聖書物語」では、アブラムは末子)
 - ② B 説 サマリヤ五書では、テラの死去は 145 歳。原典は「145 歳」である可能性があり、写本による違いがあったものと考えられる。使徒 7:4、ステパノは「145 歳」とする写本に基づいて語っている。

